

前世の記憶がある友人に襲われ
陥落させられる話

「おはよう」

「あ、おはよう」

いつもすれ違うたびに話しかけてくれるのは友達の三宅君だ。

友達と言っても大学1年生の時に一度同じ講義を履修してただけで、他に何も接点がない。

なのに彼は僕を見かけるたびに話しかけて世間話をしてくれるので、3年生になった今も友達として縁が続いているのだ。学部が違うし当然目指している分野も違うのにどうしてこんなに親しく接してくれるのか正直分からない。

最初は律儀な人だと思っていたけど、いつでも変わらない人懐っこい笑みを向けてくれると悪い気はしない。何度か食堂で一緒にご飯を食べたことがあるけど、僕が好きな話題を色々話してくれて面白い人だなんて思っていた。

「最近、君が好きそうな中華料理店を見つけたんだけど、今度どう？」

「ほんと？ 小籠包ある？」

「もちろん」

この前僕が食べたいと言っていたのを覚えていてくれたんだろう。

癖のある黒髪を揺らし、明るいグレーの目を細める彼の誘いに僕はそのままうなずきそうになる。

「いや、こいつ最近バイトで忙しいから。また今度誘ってくれ」

「えっ」

会話を阻止したのは僕の彼氏だ。いつの間にか隣にいた彼は三宅君を警戒するように睨みつけると僕の肩を押してさっさと歩き出してしまう。

「ちょっと、まだ話してる途中なんだけど」

「馬鹿。お前、アイツに食われるぞ」

「食われる？」

彼氏の言葉が理解できずオウム返しをしてしまう。同じサークルに所属していた関係で仲が良くなり、先月彼から告白をされて付き合い始めた。

それまで恋愛対象は女性だと思っていた僕だけど、誰かが自分を好きと言う事実には浮かれて付き合い始めて、男性相手でも案外上手くいくものだと知った。

そんな彼が三宅君を警戒しているのだ。当然僕にだって男友達はいる。だけど彼は三宅君だけを快く思っていないらしい。

「三宅君が僕をそんな目で見ているわけないだろう。普通の友達だって」

「そうやって隙を見せるから狙われるんだよ」

彼は心配性だと思う。世の中、同性を好きになる人間はわりと少ないはずだ。僕の周囲には彼と僕だけだし、話を聞くこともない。

何度も彼氏に念押しをされてその日はいつも通りに過ごした。

「ねえ、これ前に好きだって言ってたから」

「え？ほんと、いいの？」

翌週。1人で構内を歩いていると三宅君に出会い、彼は僕の好きなお菓子をプレゼントしてくれた。

「前に好きだって言ってた」と言っていたけど、伝えた記憶はない。当てずっぽうだとしたら随分ドンピシャだ。エスパーなんじゃないかって思う。

「ありがとう、最近ハマってるんだ」

「そうだったと思った」

そう言って微笑む三宅君。切れ長な目は色気があって、緩やかに曲線を描く口元からは八重歯が見えている。女の子にモテそうな見た目だけどそういった浮ついた話を聞くことは無い。

「そうだ。実は君に渡したいものがあったんだけど、今日忘れちゃってさ」

「ええ？ お菓子も貰ったのにさらに何か貰うなんて悪いよ」

「いやいや、俺が好きでやってるだけだから。それでさ、できれば早めが良いから、もし時間が空いていれば今から家まで来てもらっていいかな？」

——アイツに食われるぞ

彼氏の言葉が頭によぎる。

ありえないと思うのに真剣な表情が脳裏に浮かんで言葉に詰まってしまった。

「……やっぱり迷惑かな。君の彼氏も嫌そうにしてたもんね」

三宅君は目に見てわかるくらい落ち込んでいる。

「それは……」

「俺あんまり友達がいなくてさ。君は別の学部なのに仲良くしてくれるし、いっぱい話してくれるから……甘えてるところがあったんだ。ごめん」

申し訳なさそうな反応をされるとこちらも心が痛い。僕だって三宅君とは気が合う友達だと思っているし、いつも話しかけてくれるのは嬉しい。

別に友達の家に行くくらい普通のことじゃないか。
少なくとも三宅君は優しくて良い人だし、疑いすぎる
のも酷いと思う。

「僕だって三宅君と仲良くできて嬉しいよ。気をつかわ
せてごめんね。友達の家に行くのに問題なんてない
よ！」

「ほんと？」

パッと表情を明るくする三宅君。

そうだ、なんの問題もない。ちょっと友達の家に行く
だけなのだ。

まだ講義中の彼氏に「今日は友達と遊ぶ。また明日」
とメッセージを送ってそのまま三宅君と彼の家に向かっ
た。

それから。

……それから。

あれ？

ボンヤリと意識が浮上する。見慣れない天井が目に入
って、記憶が飛んだんじゃないかって混乱した。

さっきまで何をしていたんだっけ？
たしか三宅君の家に向かって……。

そうだ、家で三宅君が美味しそうなココアとかお菓子
とか振る舞ってくれたんだ。お菓子は手作りって言って
たけどすごく美味しくて。懐かしさを感じるくらい不思議
と僕好みの味だった。

ココアはミルクたっぷりで甘さ控えめ。これも僕の好
みドンピシャだ。

なんで？ 彼氏にも言ったこと無いのに。

背中に柔らかいベッドの感触がある。寝てたのかな。

そうだ、食べた後なんだか眠くなってきた。三宅君が
ベッドで昼寝して良いよって言うてくれて。あんまりに
も眠いから言葉に甘えて。

「んあ……ふう、、、」

深く息を吸おうとすると下半身に異物感があって、呼
吸がしづらい。やけに熱がこもった息が口から漏れて頭
がジンと痺れる。

それにさっきから空気の冷たさが肌に刺さる。まるで
裸で寝てるみたいな感じが……。

意識が少しずつハッキリしてきて、臉を持ち上げると目の前に三宅君がいる。整った顔に近いし何故か全裸だ。自分の体を見下ろすとやっぱり同じように裸で。

「は……」

三宅君の剥き出しの下半身は僕の股の間に密着している。布一枚身につけていない僕は脚を大きく開かされていて、太ももを動かせないよう驚掴みにされている。彼が押しつけるように腰を動かすと、ゴリッと僕の中で凄まじい衝撃が駆け抜けた。

「ああっ、、!?」

「おはよう♡よく眠れた？　なかなか起きないから心配だったよ」

挿入されてる。

三宅君のが僕の中に入ってる。

「なっ何これ…っ、ど……ど、してえ…んっ♡」

「彼氏とはもう何度か寝たんだね。ナカ解したんだけど結構すんなりいったからさぁ」

「三宅く…抜いて…」

ぐりっ♡

「ヒィっ、、♡」

「ほら、前立腺で感じるようになってる。初めてじゃない。今世は俺が初めてじゃないんだ……あ～あ……」

見下ろす眼差しはあまりにも冷たい。なのに目の奥に宿る熱はドロドロしていて溶けてしまいそうだ。

捕食する獣のような目ってこういうのなんだろう。彼氏に言われた「食われる」の意味を今更実感した。

「ひと目見た時から君に惹かれていたんだ。でも理由がわからなくて、ずっと戸惑ってて。何故か君の好きなものがわかるし、君といると安心できた」

「抜いてってばあ…んうっ♡」

腰を逃がそうとしても阻止するように猛る陰茎をアナルに押しつけ、緩やかな律動を開始する。咥えているモノはまだ入りきっていないのか、硬い亀頭で肉壁を押し広げるように奥へ奥へと進んでいく。

とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡
♡

「ひっ…♡あっ、ううっ♡やだっ、止まって…あっ♡」

「可愛い声♡寝てる時も愛らしい吐息が漏れて素敵だったよ」

「そんなっ♡やめっ♡ああんっ♡」

カリで前立腺を抉られると一際大きな声が漏れてしまう。襲われているのに感じてしまうのが嫌だし恥ずかしくてたまらない。

どうしてこんなに反応しちゃうの？
嫌、嫌だ。嫌なのに……！

「それでね。君に彼氏ができたって聞いた瞬間、頭を殴られたような衝撃を感じて思い出したんだ。前世のこと」
「ぜ…んせ」

ばちゅん♡

「んうっ♡♡やっ嫌だって言ってるのにい…」
「はぁ…♡ナカ柔らかくてあったかいし、チュウチュウ吸いついてくるのが甘えてるみたいで可愛い」
「違う…っいいから抜けって、言って…るだろっ」

必死に相手の肩を押して離そうとするのに力が入らない。逆に相手は体重をかけて僕の方に覆い被さってきた。

ごりゅっ♡ぐりぐりぐりっ♡♡♡♡♡

「んぐっ!? ああっ…深っ、、♡♡」

「ふふっ感じちゃって抵抗できないね♡じゃあこっちも♡」

こりっ♡くにゅくにゅっ♡

「んひい!？」

相手の長い指が両乳首を押しつぶすように捏ねてくる♡指の腹でグリグリされて、爪先でピンピン弾かれて胸から甘い痺れが全身に広がっていく♡

「やっぱりココ、好きなんだ。でも慎ましい大きさだし色も薄いから今世ではあまり弄ってないのかな」

クリクリっ♡こりっ…ピンピンっ♡♡こりっ…♡

「そこ、やあっ♡やめ、んっ♡」

「可愛い♡また真っ赤でいやらしいくらい大きく育ててあげる♡」

どんどん固くなっていく芯を根元から抜くように指で摘ままれ、痛みを感じるくらいに引っ張られる。

「やあっ……！」

鈍い刺激がすでに快楽に変換されて、嫌なはずなのにもっと欲しくなる。こんなおかしい……！

ピストンも乳首責めも激しくなっていて、同時に与えられる快感でどんどん波が大きくなっていく♡僕の陰茎は真っ赤になって反りたっていて、今にも達してしまいそうだ。

「どうし、て…こんなことっ♡」

「前世を知ってからもう我慢できなくなった。君は俺の恋人なのにどうして他の男を選んだの？」

「意味わからな…っ」

ゴリゴリっ♡

「んっ♡あああああっ♡♡」

前立腺を力任せに潰されて悲鳴に近い喘ぎ声が飛び出る。腰がわずかに浮いて相手の陰茎に体重がかかり、さらに逃げられない快樂に襲われてしまう♡

「やっ♡やらっ…あっ♡♡♡」

「どうして君は覚えてないの。思い出してくれないの。俺だけしか知らないなんて耐えられない」

苛立ちに任せるように三宅君は乳首に吸いついて勢いよく唇をすばめた。

ジュルル〜〜〜ッ♡♡チュっ…チュウッ♡ちゅぱっ♡♡

「んっいぎいいいいいっっ♡♡♡♡♡♡」

「ふふっ、甘あい♡♡魂は同じだからイイって感じると
こも同じなんだね♡♡♡」

「お、ねが…もっ嫌、、♡怖いっ怖いよお…♡♡♡」

「大丈夫。だってこうやって扱られるように責められな
がらぁ…耳元で優しく囁かれると……」

ぞくっ♡♡♡

「んっ、、!?♡あっ、、アアッ♡♡」

「ほら、簡単に甘イキしちゃう」

ビクッと身体が痙攣したのに精液は出ていない。絶頂
したはずなのに下半身の熱が残ったままで、グルグル駆
け回っているようだ。

溢れるカウパーをまといながら情けなく陰茎を振るけ
ど無駄なあがきだった。

出したい、イってるのにイけない。

「んっ…♡な、なに…これえ♡苦し、、、♡♡」

「もしかしてオスイキしか経験ないの？ ふふっ戸惑っ
てて可愛いね。出したい？ 出したいでしょ？ おねだ
りしたら考えてあげる♡」

「い、嫌……っ」

「その彼氏なんかより俺の方がよっぽど君を知ってる。
君が好きなもの全部あげられるよ？」